

40 月舟寿桂から曲直瀬道三へ

——『禪本草』をめぐるつて

○小曾戸 洋・宮川浩也・真柳 誠

曲直瀬道三『啓迪集』（一五七四）の巻頭を飾った策彦周良（一五〇一〜七九）の題辞中に

……恵日雅述『禪本草』、湛堂準老製『炮炙論』以佐之。
儒・釈・医之意旨、雖有馬異盧同、先聖後聖其揆一也。

……

とある。この『禪本草』『炮炙論』とはいったいいかなる書か。従来これについて言及したものはないようである。

道三（一五〇七〜九四）よりさき、室町中後期に活躍した学僧に月舟寿桂（幻雲、一四六〇〜一五三三）がいる。月舟はすこぶる医書に通じ、当時の一流医師と交友関係をもった。需められていくたの神農画に賛をなしたが、そのうちの一つに次のような七絶がある。

人身牛首姓其姜

手握楮鞭編藥方

今日吾家禪本草

鳥頭毒氣有誰管

前南禪寿桂

この『禪本草』は策彦周良のいう『禪本草』と同一書に違いあるまい。月舟は『史記』を研究し、宋版（南化本）『史記』に詳細限らない注を施した。その先駆をなし、月舟の学んだ五山学僧に桃源瑞仙（一四八〇〜八九）がいる。桃源は相国寺の住持となった高僧で、その著『桃源史記抄』は月舟が『史記』注でしばしば引用するところでもある。これは月舟注には引用されないが、演者らは『史記抄』の扁鵲倉公伝の部分に『禪本草』や『炮炙論』に関する記載があることに気付いた。

盧山恵日雅禪師乃真淨高弟、嘗著『禪本草』一篇、曰「禪味甘性涼、安心臟、祛邪氣、闢壅滯、通血脈、清神益志、駐顔色、除熱惱、……」。

……湛堂準禪師、与雅公為法門昆仲、因雅述『禪本草』、乃製『炮炙論』佐之、曰「人欲延年長生、絶諸病者、先熟覽『禪本草』、若不觀『禪本草』、則不知藥之温涼、不弁藥之真偽、而又不諳何州何県所出者最良、既不能窮其本末、豈悟藥之体性耶。……」。

右はほんの一部であるが、桃源の記文により、当時いかに『禪本草』『炮炙論』の二書に高い評価が与えられていたかがうかがえる。

実は『禪本草』は『説郛』（宛委山堂本）、『五朝小説』、『宋人百家小説瑣記家』などに収められて現伝している。恵日は宋人で、むろん遣唐使の薬師恵日でも、帰化僧の東明恵日でもない。同書は千字にも満たない短篇で、「禪」「講」「戒」「定」「浄土」の五件を薬物になぞらえ、本草書の記述形式にのっとり、その薬性・効用・品質・用法などを説いたものである。

『禪本草』はこのように医薬書の体裁に擬した仏書で、医薬書ではない。しかし、策彦の題辞にも説かれるように、当時、儒・釈・医は不分離の關係にあつた。その幅広い中国最新文化の導入・受容の担い手は、医界・画界なども含めて学僧にあつたといえる。

従来、近世日本漢方の基盤は、田代三喜が明よりはじめて李朱医学を持帰り、道三がこれを承け、日本化して広めたというのが通説である。ところが、月舟などの遺した研究の足跡をみるに、その興るべき学問土壌はずで

に十分に熟成されていたと思わざるをえない。阿佐井野版『医書大全』（二五二八）や、五山版『察病指南』、一乗谷版『勿聽子俗解八十一難經』（二五三六）の出版もその一つの現れである。道三の仕事は新たに続々と伝えられる中国医書を、いかにすみやかに効率的に受容するかにあつた。『啓迪集』の編纂資料には嘉靖版医書が多く使用されると推定される。それらの大半は京を中心とする五山僧、学医、知識人層より提供を受けたもので、田代三喜より授かった資料はさほど多くはないのではあるまいか。『啓迪集』完成以後も道三は新渡来医書の研究に心を傾けている。

以上『禪本草』を一材料に、桃源―月舟―策彦―道三という一つの線を示したが、それは複雑きわまりない歴史の糸の、いわば九牛の一毛にすぎない。今後、近世日本医学隆興の学術的・社会的背景について、多角度の視点からの研究が望まれる。

（北里研究所東洋医学総合研究所・医学史学研究室）